

第2章 史跡を取り巻く周辺環境

第1節 自然的環境

1. 位置・地形等（第1図）

本史跡は、今回指定となった切山城跡及び松根城跡とそれらを繋ぐ脇街道の小原越、今後の調査によって指定による保護が必要と考えられる朝日山城跡、一乗寺城跡、田近越及び高峰城跡、荒山城跡、二俣越などから構成され、石川県金沢市と富山県小矢部市にまたがって所在している（第1図）。

石川県及び富山県は、本州日本海側のほぼ中央に位置している。

石川県は南北に細長い県であり、日本海に突き出た能登地方とその南の加賀地方に分けられるが、金沢市は加賀地方の北部に位置している。その西部は日本海に接し、南東部には海拔1,500mを越える山地をかかえる。

富山県は東を海拔3,000m級の立山連峰に、南は海拔1,000m級の山々に、西は標高100～200m程度の山並みによって区切られ、北は富山湾に臨んでいる。小矢部市は富山県の西端に位置し、北・南・西の三方は山々に区切られ、東は散居景観の広がる砺波平野に接する。平野部では、市域の中央を南北に一級河川の小矢部川が貫流する。

両県の間には、白山から大門山医王山などを経て能登半島へと続く山地が連なり、この稜線が石川県と富山県の県境、即ち加越国境となっている。このうち医王山から宝達山までの約20kmは砺波山丘陵と呼ばれる標高100～200m程度の山並みが形成されており、金沢市と小矢部市の境もこの中に含まれる。ここに加賀側の北陸道から分岐して小原越、田近越、二俣越などの脇街道が越中（富山県）側へ延び、沿道に加越国境城跡群が立地している。

2. 動植物

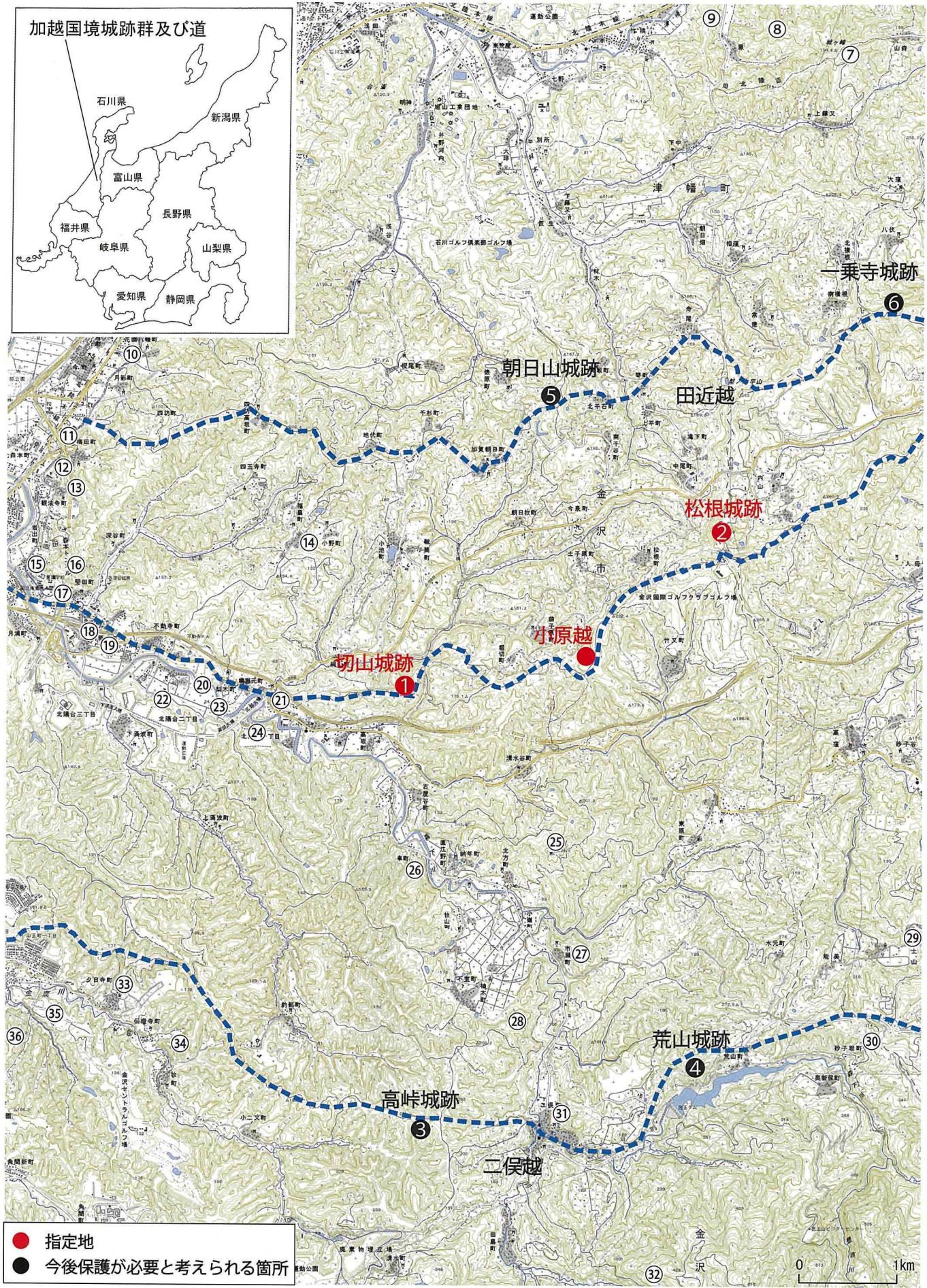
平成28年度に史跡加越国境城跡群及び道環境基本調査委託業務において、植生調査を実施した。調査地域は、石川県金沢市と富山県小矢部市の県境付近の低山地に位置し、ブナクラス域に該当するコナラ、クヌギが優占する落葉広葉樹とスギ単体の植林地が主な植生となっている。その中に伐採跡地に形成されたススキやワラビ等を優先とする草本群落の他、タニウツギ、アカメガシワ等の先駆性低木が点在するように分布している。

（1）植物相（第2図）

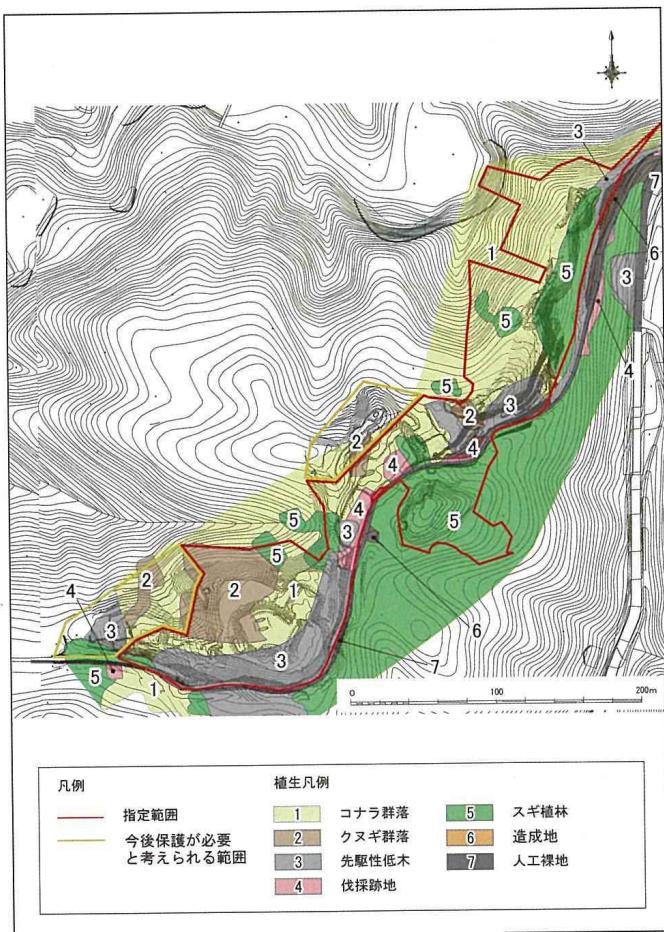
石川県レッドデータブックで分布情報が公開されている希少種及び絶滅危惧種分布情報公開種一覧（環境省ホームページ）にて該当メッシュでの生息が確認されている種について抽出した。

当該地域における植物相については、詳しく調査がなされていない。そのため、石川県レッドデータブックに記載されている希少種として、ヤブツバキクラス域のスギ植林地の林内に生育するナガサキシダと、ため池や水路に見られるイトモの2種のみの抽出であった。

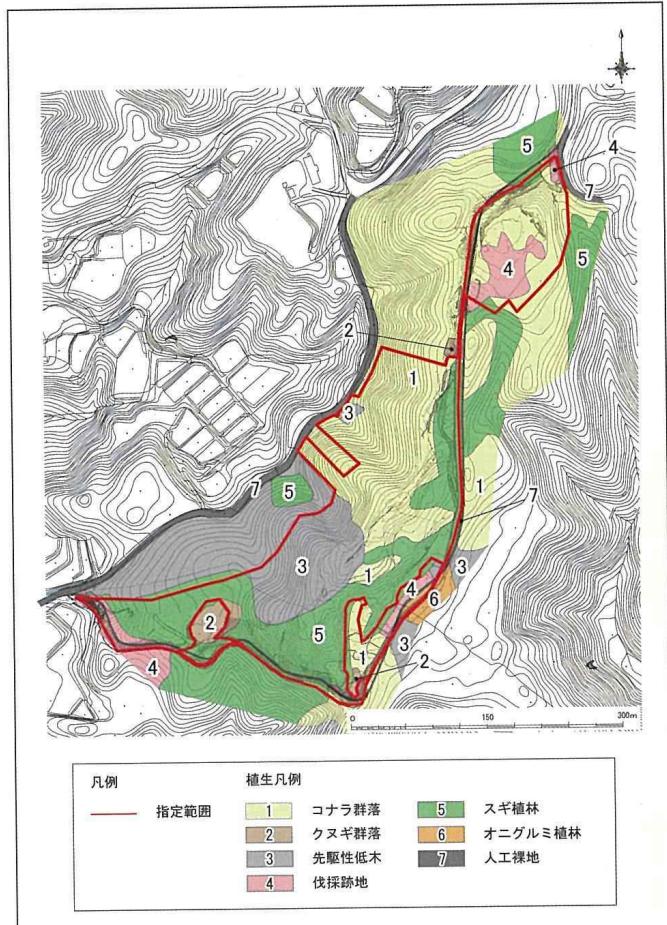
ただし、石川県レッドデータブックでは、希少種保護の観点から県内における分布情報を非公開としているため、実際に生育する希少種の種数はこれより多い可能性がある。



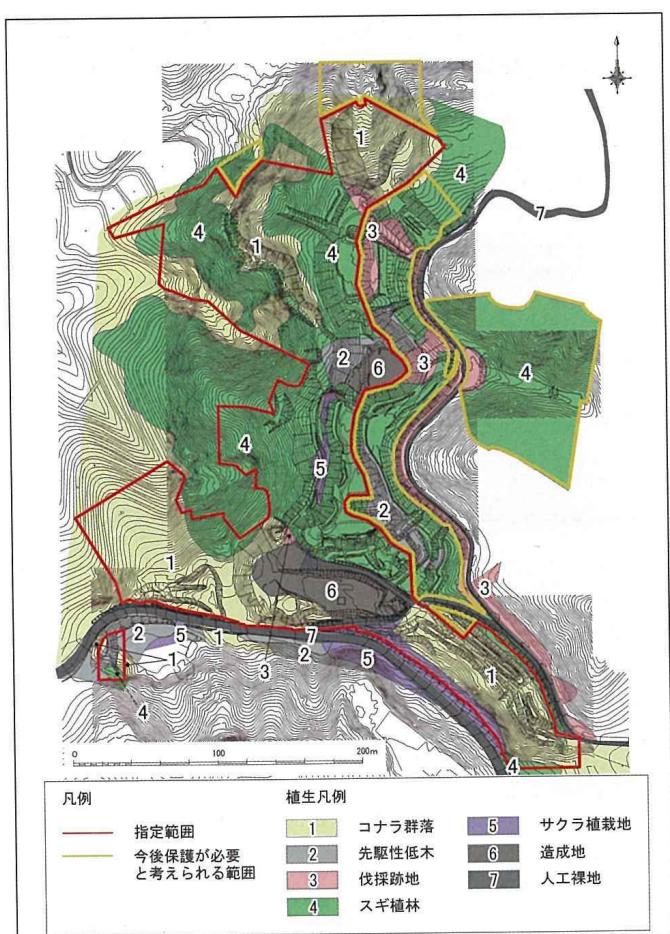
第1図 加越国境城跡群及び道の位置図



切山城跡地区



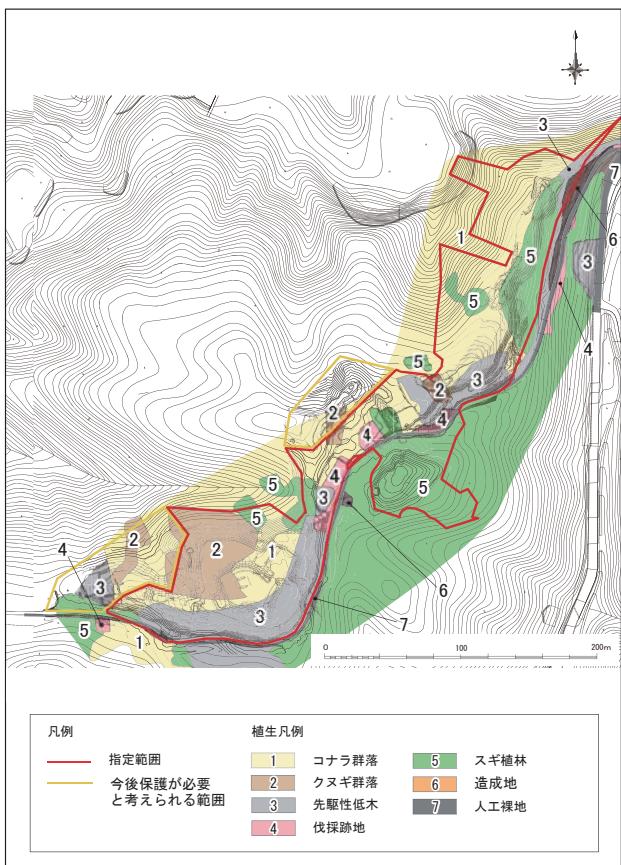
小原越地区



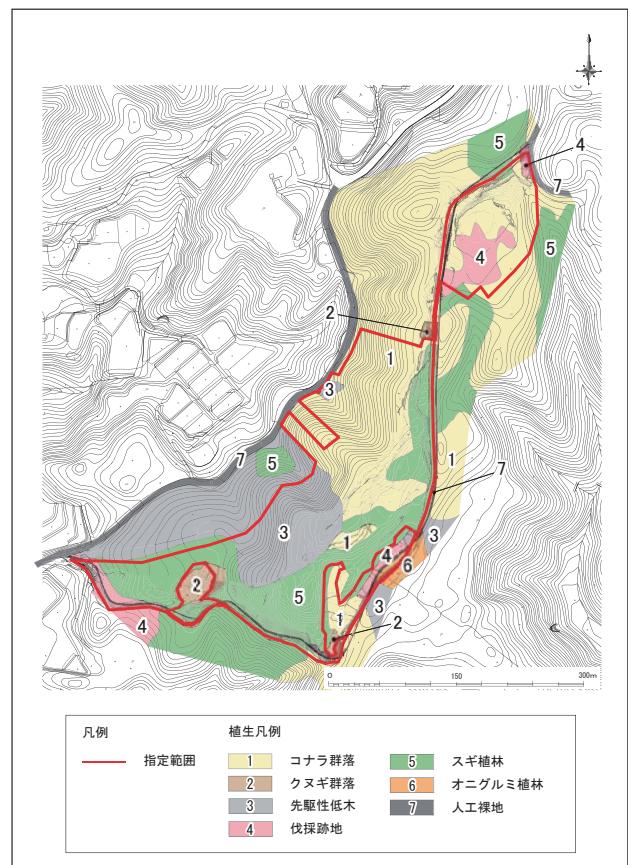
松根城跡地区



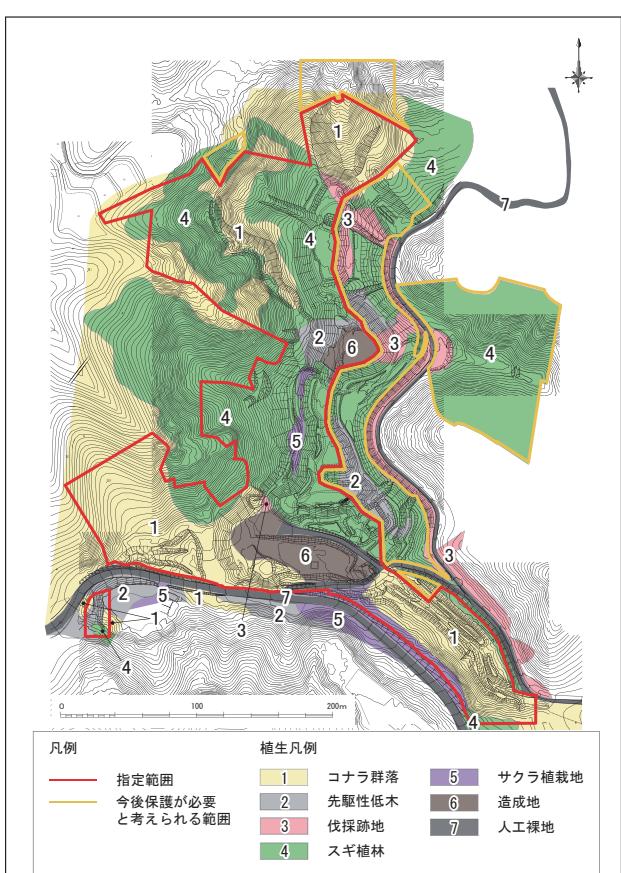
第2図 植生図



切山城跡地区



小原越地区



松根城跡地区



第2図 植生図

(2) 動物相

石川県レッドデータブックで分布情報が公開されている希少種及び第5回・第6回自然環境保全基礎調査にて該当メッシュでの生息が確認されている種について抽出した。

当該地域における動物相については、哺乳類はノウサギやキツネ、鳥類ではミサゴやサシバ、両生類ではアマガエルやシュレーゲルアオガエル、昆虫類ではシャープゲンゴロウモドキ、ナガケシゲンゴロウ、ギフチョウ、オオムラサキ、オナガサナエ等の生息が確認されている。

ただし、調査時期が古く、当該範囲での現地調査は実施していないため、現在の生息状況は不明である。その他、現地確認の結果、指定地内の各所にイノシシの足跡や掘り起し跡等が確認できた。

3. 景観

本市が景観条例で定める保全眺望点には指定されていない。

しかし、現地確認の結果、当該地域の高台に位置している指定地内には、周辺を見渡せる箇所があり、潜在的な眺望点が存在していることが確認できた（第5章第25図）。

第2節 歴史的環境

切山城や松根城、小原越が所在する森本地区には北陸道や加賀・越中間を北陸道よりも近距離で結ぶ小原越・田近越といった脇街道が通り、また河北潟・大野川を経て日本海へ至る森本川が流れている。このように水陸交通の要衝である当地域には、街道沿いに多くの集落遺跡・城館跡が残っており、以下にその概略を記す（第1図）。

中世遺跡の分布を北国街道（推定中世北陸道）に沿って北から順にみると、まず⑩花園八幡遺跡がある。古墳時代中期の遺物が大半であるが、中世の遺構は土坑などを検出しており、遺物は外面鎧連弁文の青磁碗が出土している。遺跡東方の丘陵上には式内社の波自加弥神社が所在する。同社は鎌倉時代の作とされる「木造隨身像」、室町時代の作とされる「麥喰獅子」（共に市指定文化財）を所蔵する。さらに南下すると縄文時代から近世に至る複合遺跡の⑪梅田B遺跡がある。中世の梅田B遺跡は12世紀末頃～14世紀前半の集落遺跡であり、掘立柱建物、井戸、溝などが検出されている。近世・近代溝に15・16世紀の遺物が散見できることから、15世紀以降にはその上流である谷奥に集落が移動している可能性が指摘されている。谷奥には「アミダジ」や「テランヤチ」という小字名をもつ畠地があり、14世紀～16世紀代の遺物が採集されていることからも、その可能性は高いであろう。梅田B遺跡の南西側丘陵には⑫觀法寺古墳群がある。鎌倉時代頃の土師器皿と掘立柱建物数棟、堀切が見つかっている。建物は1×1間が2～3棟、堀切は幅2m、深さ1m前後で断面U字形を呈し、尾根を切るように掘削されている。堀切は中世後期とされているが、遺物の出土はなく、鎌倉時代頃の簡単な防御施設と考えている。同丘陵の南裾には⑬觀法寺谷遺跡がある。丘陵の谷間に立地し、掘立柱建物、溝、土坑、沢と考えられる溝がみつかっている。時期は鎌倉時代頃とされる。木製品が豊富に出土しており、箸や漆器のほか下駄、鳥形、板絵などが出土している。地域の水源や山間信仰の場が屋敷地の一角に取り込まれた可能性が指摘されている。また、さらに南側の北西方向に突き出た丘陵の南裾周辺にも中世遺跡が存在するようである。やや推定北陸道から外れたが、北国街道沿いには南森本町に室町時代とされる龜田大隅岳信館跡がある。塙崎町・吉原町には中世の墓域とされる塙崎中世遺跡や珠洲焼甕を蔵骨器とする火葬墓がみつかった吉原大門遺跡があり、また吉原大門遺跡と隣接する百坂町地内では加賀焼の壺が出土している。その出土地近隣の墓地には中世期とみられる五輪塔が現代の墓に混ざって現在も残っている。吉原町七ツ塙一号墳上では経塙が確認されており、山間部にはオ

ヤシキ遺跡が所在する。大きな平坦面をもっているが、防御性が弱く城跡であるかは不明という。

北国街道と今町付近で分岐する田近越沿道には加賀朝日町に⑤朝日山城跡があり、主郭の発掘調査によって16世紀後葉の土師器皿や越前焼と共に多量の茶臼と粉挽臼が出土している。

北国街道と吉原町で分岐する小原越沿道には西から順にみると、まず吉原町には群家跡と推定される式内社の群家神社があり、井上館の一部とも推定される。東に進み岩出町の⑯岩出うわの遺跡は溝から15世紀頃の土師器皿がまとまって出土しており、儀礼的行為を行った痕跡が認められる。堅田町には、弥生、古墳、鎌倉、戦国の各時代の遺物が出土した⑯堅田城跡と鎌倉から南北朝時代にかけての有力居館である堅田B遺跡が所在する。⑰堅田B遺跡は方1町四方に相当する範囲を堀で囲まれたと推定される館跡であり、北堀と西堀を検出している。建長3年（1251）と弘長3年（1263）の紀年銘をもつ般若心経を書写した巻数板という木簡が多く土師器皿や国産・中国産陶磁器、漆器などと共に出土しており、鎌倉時代の館のあり方を考える上で欠かせない遺跡と評価される。河原市には日蓮宗寺院である円乗寺の境内周辺で17世紀末～18世紀とされる⑯一字一石経経塚がみつかっている。また同町には⑯河原市館跡が所在する。一辺約40m、幅3～3.5m、遺構検出面からの深さ1m前後の堀で囲まれた館と推定され、内部には掘立柱建物が建っている。しかし、建物や遺物からは一般の集落遺跡との差が認められず、確かに堀といえる溝は存在し、広域流通品である石鍋は出土するが、館であるかはなお検討が必要と考えられる。中心時期は13～14世紀と考えられる。薬師町には土塁の一部が僅かに残る上野館跡がある。梨木町には郭、土塁、櫓台、虎口が残る⑯梨木城跡がある。梨木城跡は城主として一向一揆旗本の奥近江守政堯の名が残る。トレント調査では16～17世紀前半の遺物が出土している。また城跡の北側には寺院の伝承が残っており、塚があることからも、その可能性は考えられる。宮野町・切山町には⑯切山城跡が所在する。そして、小矢部市との県境には⑯松根城跡がある。城跡からは⑤朝日山城跡がよく見え、田近越を通じて小矢部市⑯一乗寺城跡と対峙している。文献では南北朝時代からその名が知られるが、現在の形態は天正年間に佐々成政が大改修したときの姿を残している。

これらの他、三ノ坂道・朴坂越には③高峰城跡、④荒山城跡などがあり、その北方で小原越との間には、北方城跡、市瀬城跡、柚木城跡などが所在する。

森本地区に所在する山城の多くは木曾義仲や源義經が布陣したなどの源平合戦の頃の伝承をもつものが多い。北陸道の俱利伽羅が著名であるが、北陸道の他、小原越などの複数の脇街道が存在したことから、それらの道を各軍が侵攻していたのであろう。続いて南北朝期の争乱によるものがある。応安2年（1369）の軍忠状には松根城が「松根の陣」として見え、これが初見となる。そして、一向一揆勢や上杉謙信との抗争などで文献に表れることが多いようである。

そして、本史跡のテーマでもある前田利家と佐々成政の合戦が天正12年（1584）に勃発する。

本能寺の変から2年後の天正12年、織田信長亡き後の天下統一へ向け、羽柴（後の豊臣）秀吉と信長の次男である織田信雄・徳川家康連合軍が尾張（現在の愛知県）の小牧・長久手で争った。秀吉が柴田勝家に勝利した賤ヶ岳合戦の後、秀吉に降伏することで越中に留まった成政であったが、この合戦を機に反秀吉へと方針転換したのである。成政は同年8月に秀吉方である前田利家家臣の村井長頼が守る朝日山城を攻撃するも失敗する。そして、9月には奥村永福が守る末森城（宝達志水町）を攻撃するが、これも利家の援軍によって失敗する。天正13年になると、両者が国境付近への侵入を繰り返す中、前田勢が優勢になりつつあったが、秀吉遠征軍の登場によって成政は降伏した。この後、越中の西半分が利家の長男利長に与えられたことで、加越国境付近の緊張状態は解消され、城郭群は不要になったと考えられる。

第3節 社会的環境

1. 地域資源

本史跡が所在する金沢市三谷地区は、農業や林業が盛んである。近年は、史跡や農作物に害をもたらすイノシシもジビエとして名産化しつつある。当地域の資源はなんといっても豊かな自然があげられる。その自然に育まれた、自然薯や蓮根、金時草などは当地域の名産品である。また近隣に所在する深谷温泉は、琥珀色でなめらかな湯触りの良質な泉質を特徴としている。

周辺地域には、高度技術産業や地域拠点産業、試験研究開発機関などの付加価値の高い都市型産業にふさわしい創造拠点として整備された金沢テクノパーク、また製造業、物流施設を設置する運輸業又は卸売業による金沢森本インター工業団地が所在している。

また、複数の芸術家が地域の集落に移住し、芸術活動を行っている。

2. 交通アクセス

本史跡は金沢市郊外の山間部に所在しているため、公共交通手段は限られている。西日本ＪＲバスが運行しており、金沢駅もしくは森本駅で乗車することができるが便数は少なく、利便性が良いとは言えない。そのため、基本的な交通手段は自家用車や貸切りバス等の車両による来訪が主となる。

車両の場合は、北陸自動車道及び国道159号金沢東部環状道路（通称は山側環状、以下通称で示す。）の金沢森本ＩＣから国道304号、359号を経由して、「松根口」バス停付近から南東へ延びる市道を通じて松根城跡、小原越、切山城跡へ至るルート、また同じく304号を経由して、「加賀高坂」バス停付近から北へ延びる市道を通じて切山城跡、小原越、松根城跡へ至るルートがある。金沢市周辺からの場合は、国道159号山側環状を利用する場合は金沢森本ＩＣ経由、国道359号を利用する場合は、森本から国道304号を経由して金沢森本ＩＣ方面へ向かうルート、国道8号を使用する場合は、福久南交差点から市道を東進し、国道359、304を経由して金沢森本ＩＣ方面へ向かうルートが想定される。

ただし、車両誘導サインが未整備であるために、現状では城跡への誘導が不十分であり、整備が必要である。

バス路線では、切山城跡へは「戸保家」もしくは「加賀高坂」で降車し、それぞれ約1.5km、約1.3kmを徒歩で城跡に向かうことになるが、平日で行きが11本、帰りは12本、土日は同10本、11本である。路線バスを乗り継いで松根城跡及び小原越へのアクセスはほぼ不可能であり、徒歩で小原越は約2km、松根城跡へは約4.5kmの道程となる。松根城跡へは、「松根口」で降車し、約2.7kmを徒歩で城跡に向かうことになるが、全日行き帰り共に各4本である。時間帯が朝方と夕方に偏っているために、城跡を散策した後にバスで移動するには時間的な余裕がなく、約2.5kmの小原越と約4.5kmの切山城跡へは徒歩での移動が想定される。

3. 周辺の主な施設

周辺には、教育施設として、三谷小学校、医王養護学校、総合養護学校、森本中学校、不動寺小学校、金沢北陵高校、森本小学校、金沢向陽高校、花園小学校が所在している。また、文化、生涯学習施設として、牧山ガラス工房、土子原野外広場、三谷公民館、旭日公民館、薬師谷公民館、森本公民館、花園公民館、三谷さとやま交流広場が所在している。中でも、三谷公民館や土子原野外広場、三谷さとやま交流広場が本史跡のガイダンス的役割を担うことが期待される。